
虹色魔石の生産者

koru.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹色魔石の生産者

【Nコード】

N5678X

【作者名】

koru.

【あらすじ】

気がつきや異世界に居りまして、ひよんなことから虹色の魔石を作ることができる特異体質であることを知った元OL20歳の愛と冒険の異世界生活物語（誇大表現アリ）

いち話いち話が短いので、おつまみ程度の感覚でお付き合いいただければ嬉しいです。

1 いらっしやいませ

まず、ごつごつしていない丸めの石を拾います。

サイズは2センチ位が良いです。

それを綺麗に洗います。

そしてそれを口に放り込み、3時間程舐め続けます。

3時間後口から出すとあら不思議、虹色に輝く特殊魔石の完成です！

洗って、良く拭いて、磨き粉を付けて磨いて、商品として販売しています。

超レアアイテム”虹色にじいろませ魔石”のご用命は、魔石屋”早く日本に帰りた^{マモリ}い”までお越しください。

店主である私、西村守がマモリ対応させていただきます。

なお、当店ではツケを受けて付けておりませんので、悪しからずご了承ください。

2 客商売

「虹色^{これ}魔石の入手方法は教えられない、と、いつも言ってるでしょう」

小さなテント内には私と、大柄な魔術師。

2人入ってるだけで息苦しい狭さ。

無店舗営業を始めて3ヶ月、大分お金も溜まったし、もうそろそろ店舗を持つてもいいかもしれない。

こんな狭苦しいところで、こんなムサイ男と頭を突き合せなきゃならない苦痛がなくなるならば。

「全属性を持つ魔石など、この世に存在するわけが無いんだ。もしや、コレは魔獣の核と魔石を融合させて作った、特殊アイテムなんじゃないのか」

淡々と、私の顔色を見ながら喋る魔術師に、あからさまにうんざりとした表情をしてやる。

「そう思うんなら、自分で作ってみりゃ良いじゃないですか」

「もうやってみた。でもできなかったから聞いているんだ」

そりゃできないでしょうね。

「じゃあ違うんじゃないんですかー？ もー！ これ以上営業妨害するなら、今後貴方には売りませんよ」

上得意の客だが、こんなに絡まれるなら居なくてもいいや。

口を尖らせて抗議すれば、魔術師は一瞬黙り込む。

「……それは困る」

「じゃあ、詮索するのはなしで！ 本日のお買い上げは、極小粒が5個と大粒が1個で23万になります」

金平糖サイズの魔石を5個と3センチ位の大粒の魔石を1つ、手作りの小さな巾着に入れる。

先にお金を受け取り、金額を確認してからその小袋を魔術師に渡す。

ひと月の生活費に余りあるその金額を、ポンと出す金持ちっぷりが憎いぜ。

「毎度ありー」

「次はいつごろ店を出す」

帰りがけに聞かれて、一週間後と応える。

3 そんな理由で魔石ゲット

魔石生産の裏話。

最初この世界に来たときは、死ぬかと思った。

うん、本気で死に掛けた。

主に空腹で。

で、空腹を紛らわせるために、小石を飴代わりに舐めたのがきつかけだった。

ひたすら舐めて、ふと口から出したとき、只の小石が虹色の石に変わっていた。

あんまり綺麗だったから、一か八か宝石店に売りに行った。

宝石店は普通の宝石のほかに、魔石（火・水・風・土・光のそれぞれ）の属性の魔力のこもった石も取り扱う場所なので、私の持ち込んだ虹色の石が、全属性を備えた稀有な魔石であることが判明、高額で買い取ってもらえた。

今思うと、なんて良心的な店だったのだろうと思う。

ぼろぼろな風体の小娘が持ってきたわけのわからない石を買い叩きもせずに、真っ当な金額で引き取ってくれたのだから。

そうして私は路地裏生活から一転、まともな宿屋で寝食を得る事ができるようになったというわけさ。

4 宿屋の女将さん

「マモたん、朝でしゅよー」

甘ったるい声が耳元をくすぐる。

「マーモーたん、起きないと、お姐たんねえが一緒に寝ちゃいましゅよ

ー」

布団の端を捲られる気配。

背後にぴたつとくつつく柔らかい体、そして私の寝巻きの裾から侵入する華奢な手指がくすぐったくて身を振る。

「んーっふっふっふ、かーわぁいいい」

耳たぶをぱくつと啜えられ、甘噛みされるに至り意識が覚醒。

「……おはようございます…、女将さん」

「女将さんじゃなくて、お姐たんねえで、良いってばあ」

全力で拒否。

愛妻家の宿屋しゆくやの主人まにに締められたくないので。

5 宿屋の主人

「俺でさえ……モーニングキスしてもらったことねえのに……くそがつっ！」

という台詞と共に、勢いよく井がテーブルに置いていかれる。

足音も荒く厨房に戻るご主人。

いや、モーニングキスもモーニングコール（？）も要らないし。

あなたの嫁の暴走を止めてください。

そして、スペアキーを彼女に渡さないでください。

「いただきます」

目の前の井に手を合わせて、スプーンで掻っ込む。

親子丼美味し。

醤油が無いから塩味だけど、美味し。

着々と日本の味をこの宿に侵食させてゆく。

問題の多いこの宿を変えれないのは、性格に難在れど料理の腕は一級品であるご主人の飯のせいだ。

胃袋を掴まれるとはこういうことをいうのか……。

6 門兵

「気をつけて行くんだよ、近場でも何があるかわからないからね」
顔見知りの門兵が小さい子にするように、腰を折り頭の位置を下
げて私と視線を合わせながら頭を撫でる。

「…はい、行ってきます」

純粋な心配であると思われるので、人の良さそうなその青年に素
直に返事をして門を通してもらう。

只…一つ言わせて貰うなら、私は彼よりも年上だ。

彼はまだ十代であると、他の兵から聞いている。

私は今年で二十歳になった。

身長が147センチであるのがネックなのはわかっている、日本
に居たときでさえ高校生と間違われていたんだから。

だから、この世界で子ども扱いされるのも仕方ないんだろう。

甘んじていよう。

7 石集め

河原で丸っこい小石を採取する。

あんまり大きいのは舐めるのが骨だから、せいぜい大きくて3センチ位。

できれば2センチ以下のサイズが手ごろだ。

販売単価も3センチ越えだと8万、2センチが5万、もっと小さいのだと3万だ。

普通の単属性の魔石なら3センチでも1万程度くなので、虹色魔石の希少性というか、お値段の高さがわかる。

魔石は生活の中に深く根ざしていて。

コンロ代わりだったり、扇風機的な何かだったりとても便利に使われる。

勿論虹色魔石もそれら全てのことができるわけだけど、そのために使うなら普通の単属性魔石を使うほうがコストパフォーマンス的に良い。

だけど、私の魔石は魔術師の人たちに飛ぶように売れる。

……何に使われているのか、まだ聞けないでいる。

8 誘拐

率直に言おう、誘拐された。

手ごろな小石を小袋に程々に収集して帰ろうとしたとき、見知らぬおっさんが近づいて来た。

「お嬢ちゃん、こんなところで何をしているのかな？ お父さんやお母さんはどうしたの？」

おっさんこそどうした、この河原は街道から外れていて人なんか来ない場所だぞ。

十分に警戒していたが、あっさりと掴まってしまった。

仕方が無いだろう、私は魔術師でもないし剣士でもないんだから。ついでに言えば足も遅い。

「やあっ！！ 何よ！ 私を誘拐して身代金でも取ろうと思ってるの！？」

腕を拘束され、肩に担ぎ上げられて運ばれる。

「いやいや、君は十分価値があるよ」

そう言いながらお尻を撫でられぞっとした。

これはあれか、身代金目的の誘拐じゃなくて、人身売買目的の営利誘拐か……。

どっちにしても絶体絶命だ。

9 他にも居た

連れて行かれたのは王都の近くに在る街だった。

王都ほどではないが、中々活気の在る……わりと粗野な感じの街だ。

その街の更にスラム的な場所。

私の他にも攫われてきたと思しき女性達と子供が数人一つの部屋に押し込まれている。

汗臭くてそれ以上に汚物くさい。

非常に不衛生な場所である。

嘔吐しなかった自分に拍手。

「お前は未通娘おほこだろうからそのまま売りに出そう。いい値が付きそうだ」

おっさんはそう言って私を部屋に押し込んで行った。

いやいや、未通ではありませんがね？

これでも過去に彼氏の一人や二人居たわけなんですよ？

などとは、ばらしますまい。

経験者とわかれば、味見されてしまうかもしれないわけですし。

自分が異世界に居ると理解したときと同等の絶望感を感じながら、部屋の隅で膝を抱えた。

10 逃げるために

こっそりと、小粒の小石を数粒まとめて口に含む。

少々じやりじやりと砂が混じっているが仕方が無い。

この程度の小石なら30分も舐めていたら虹色魔石に変わる。

魔石を作ったところでどうなることも無いかもしれないが、何もしないでいるのも辛い。

もしかしたらこの中に魔術師の人が居るかもしれないし。

そうしたら、上手くこの魔石を使って逃げることもできるかもしれない。

ぷつと一粒掌の中に石を吐き出せば、ちゃんと虹色魔石が出来上がっている。

地道に10粒程の魔石を作り上げた。

後はこの魔石を使える人を探すだけだ。

11 魔石を使う人

魔術師、あるいは魔術師でなくても魔石を使用できる人を探すため、ずっと膝に伏せていた顔を上げて室内を見回した。

狭くはないが薄暗く人の絶望で溢れかえった部屋の中で、しっかりと私と合う目があった。

背筋のしゃんとした、幼くても現実を見据え何とかしようとしている気概の在る目……か？

何とかなるだろうか。

少年はゆっくりと立ち上がり、私の方へと歩いてくる。

そして、どすん、と私の前に座り込む。

目にある力は、実のところもう最後の残り火なんだろうか。

体は随分と疲れているようだ。

「……何か、食べ物を持っていますか？」

小さな声で訊ねられ、首を横に振る。

生憎と河原へと持参していた昼食は、誘拐されたときに放置する

こととなった。

「……先程なにか口に行っているように見えたのですが？」

魔石を口に行っていると見られていたのか。

持っていた小袋の口を開き、ころころと魔石と小石を手のひらに

零す。

「空腹を誤魔化すのに、舐めてただけ。残念だけど、只の石と、

腹の足しにならない魔石です」

少年は私に断りを入れてから、私の掌の上から虹色をした魔石の

粒をそっとつまみ上げた。

そうして、魔石を検分し、少しだけ目を丸くした。

「これは……虹色魔石？」

その名称を知っているということは、この少年は十中八九魔術師なんだろう。

確認してきた少年に、頷いてみせる。

「君が、取ってきたの？」

取ってきた、が何を指しているのかちよつと判らない。

「それは、私が商うために所持している魔石です」

「……そう、ですか」

私の掌の上に魔石を戻し、少年は少し逡巡してから私の目を見て口を開いた。

12 望みを託し

「その魔石を数個譲ってくださいませんか」

案の定の言葉だった。

「君は、魔術師ですか？」

頷かれる。

「君にこの魔石を渡せば、ここから逃げ出すことは可能ですか？」

少し躊躇われ、そして言葉が返される。

「僕だけなら、逃げ出せます。自警団に訴えてここを押さえてもらいます」

きっぱりと言い切ったその言葉に、私は首を横に振る。

そしてここに連れ込まれるまでに見た状況から。

「街の自警団と、この組織は癒着があるみたい。自警団と思しき人たちとすれ違いましたが、誰一人として私を助けようとする人はいなかったから」

白昼堂々の誘拐行為なのに。

「だから、大変かもしれないけど、王都まで助けを呼びに行ってくださいますか？」

石粒と魔石が混ざった中から魔石をすべて取り出し、それを少年の掌に握らせた。

13 石を舐めつつ

魔術で部屋をこっそり抜け出した少年を送り出してから一日が経過した：多分。

窓の無い部屋だから、太陽の動きがわからないし、食事は一日に一回、朝なのか夜なのかわからない時間に支給された。

掌サイズの硬いパン1つを少しずつ噛んで、唾液で柔らかくしながら食べる。

少量でも良く噛むせいか、割と腹が膨れる気がする。

懐かしいなあ、この世界に来た当初の過酷な生活が思い出される。パンすら手に入れられず、石ころを舐めたあの頃。

パンをもらえるだけでもありがたいなあ。

きつちり”いただきます”と”ご馳走様でした”をしたら、まわりの人たちから少し引かれた。

いやいや、有り難いことなのになあ。

壁に背中を付けて楽な姿勢を取ると、小袋から出した小石の土を払い、数個口に含み転がす。

数名の子供が飴と勘違いして私にねだってきたので、石ころであることを言ってから渡した。

子供らは私の真似をして口に含むと、直ぐに吐き出した。

「だから言ったのに」

「なんで石なんか食べてるの？」

素直な疑問に、小さく笑う。

「少しは腹が膨れる気がするからだよ」

そういうと、子供らは吐き出した石ころをもう一度口に含み、飴のように舐めた。

ああ、無事にあの少年が助けを呼んで来れたら良いんだけど……。

14 深夜の救出

多分深夜。

皆が皆寝静まった頃、それはやってきた。

壁の外及びドアの外から聞こえる物騒な音に一気に意識が覚醒する。

とりあえずドアの前から離れておく。

室内の全員が目覚め、部屋の中央に固まっていると。

思いのほか普通にドアが開かれた。

「お、待たせ、しました、約束、守りました」

ドアを開けたのはあの少年。

まだ一昼夜くらいしか経っていないのに、王都まで行って帰ってきたのか。

息を切らせている少年に駆け寄る。

「ありがとう。大丈夫だった？」

私よりも少し背の低い少年を抱きしめ、労わるように背中を撫でる。

「だ！！ だ、だ！ 大丈夫ですつ。 王宮騎士団が派遣されたの

で、もう大丈夫です」

王宮騎士団……それはまた、ずいぶんと大きいところが出てきましたね。

15 救出されて一息

くっさい部屋から救出されて、この街の役所の一室で食事を頂いている。

私より前に入っていた人で、かなり汚れてしまっている人たちはお湯を貰い体をきれいにし、簡素な服を支給されていた。

「ああやっぱり居た！ 無事だったか！」
やっぱり？

声の方を振り向けば、うちの店の上得意であるあの大柄な魔術師が一直線に私に向かってきた。

口に入れていたご飯を飲み下し、椅子から立つ。

「どうしたんですか？ こんなところに」

「馬鹿がつ！ 一人で外なんか行くからだっ！」

え、え？ 何で怒られてるの私。

目を白黒させていると、目の前に立った大柄な魔術師に頭をがしがし撫でられた。

なんで撫でられてるの私？

「無事でよかった」

ひたすら撫でられる…頭がぐらぐら揺れて気分が悪くなりそうなんです。

16 仮眠後帰宅

推測しますに。

私が居なくなる＝虹色魔石が入手できなくなる。

ということでのこの魔術師が心配したのだと、うむ、納得。

華麗なる自己完結で、この状況の説明を付けようと思うのだがし
かし。

「あー、すみません、ひとりで帰れますから」

「気にするな、どうせ同じところに帰るんだ」

深夜に救出されて明け方まで仮眠を取った後、半分眠ってる状態
で強引に馬上に乗せられ、馬を操る魔術師に腕の間でちょこんと…。

一度バランスを崩して落馬しそうになったせいで、魔術師が片腕
を私の腰に回してホールドしてくれるのは有り難いんですが、密着
することになって居た堪れないわけです。

朝の肌寒さから守るようにマントにくるまれて、顔だけ外に出す

……どこのカンガルーの親子ですかと。

朝もやの掛かる早朝で、他に人もいないから、暖かさ優先で我慢
しますけどもね。

それにしてもだ。

急いでいるのか駆け足で走る馬の振動でお尻が痛い。

もう乗馬はしないでおこう、そう思うくらいには……。

王都まで徒歩で半日だったが、あと何時間この苦行をせねばなら
ぬのかと考えると、現実逃避と疲れでうっかり馬上で寝てしまいそ
うになった、危ない危ない。

17 向かう先

ぼっくりぽっくりお馬さんに揺られる。

さつき休憩したときに、お尻が痛いことを訴えて、一人で歩いて帰ると言ったらゆっくり歩いてくれるようになった。

もっと早く言えばよかった。

街に入るが、降ろされる気配無く…不穏な方向を目指している。

「あれ？ どこ、行くんですか？」

「折角だから、このまま城へ」

何をどうすれば”折角”で、”城”へ行かねばならないのか、さっぱりわからないわけです。

魔術師の操る馬は城を目指し…ああ、城門を潜っちゃった。

「宿いえに帰って休みたい」

「少しだけ、顔を見せてやってくれ」

誰に？

聞きたかったが、ぐっと我慢してみた。

顔を見せれば帰れるなら、文句なんかで時間を食うのは無駄なこと。

やっと馬から下りたときにはすっかり腰砕けになっていて、魔術師に子供のように抱っこされて運ばれたことは記憶から除外する方向で。

18 偉そうな人

で、こちらはどちら様でしょう。
随分偉そうなんですが。

「お前がああ魔石を販売している娘か」

随分偉そうな…。

「何処から仕入れている、仕入先を聞かせたまえ」

随分偉そうな…。

「両親はどうした、まさか、お前のような子供が一人で商っているわけではあるまい」

随分偉そうな…。

「答えられんということは、非合法的ルートであるということか」

随分偉そうな…。

「今仕入れ元を明かすなら、稀有な魔石であるが故、罰は与えずにおくぞ」

随分偉そうな…。

「何か答えんか！ 娘っ！！」

.....
むかつ。

ゆっくりと息を吸い込み、口を開く。

「では申し上げさせていただきますが。大体、誘拐されて帰ってきたばかりの小娘を、無理矢理連れて来させた挙句、1時間以上も待たせて来たかと思えば、椅子にも座らせないまま勝手にべらべらと自分の都合ばかりを並べ立て。まずは座らせる、こっちは慣れない馬で足腰がぐがぐ、夜もろくに寝てないというのに、茶の一つも出てこないし、一体どんなクソかと思えば。魔石の仕入れ元を教えるときだ。仕入れ元を教えるってことは、今度は私を介さず魔石を手に入れようとしているのバレバレ、ありえないこと言い出し、教えるわけねえだろ、非合法がなんとか言えばこっちがびびるとでも思ってたんだが、親のことまで引き合いにだして揺さぶるうな、クソもいとこらだ。終いには、いま教えたら罪には問わんとか、ありえねえ、大体どんな罪だよ。どうせ権力で法もなんもかんもねじ伏せて、私を潰すなり殺すなりするつもりなんでしょうが。私を殺したら、魔石を入手できなくなりますよ」

ニツコリとした笑顔つきで、マシンガントーク。

目を白黒させている多分貴族な感じのおっさんと、ぼかんとした顔でドアの前で衛兵よろしく立っている魔術師を見て、少しすつきりした。

20 軟禁中

只今絶賛、軟禁中。

「投獄されなかっただけマシかな……いやいやいや、妥協してはいけない。」

「大体私悪いことしてないもん。」

「出された紅茶を飲み、美味しいクッキーをもぐもぐもぐもぐ。」

「ああ、美味しい……。」

「うつとりと呟くと、くすりと控えめな微笑みが降って来る。」

「お代わりはいかがですか？」

「給仕をしてくれる女中さんの勧めるまま、2杯目をいただきながら、景色の良い窓の外に目をやる。」

「王宮の5階（最上階）にある客室なので、王都が一望できます（他に高い建物ないし）。」

「滅多にできない経験なので、とりあえず堪能することにしました。今後の身の振り方は、その都度決めていくこととします。」

21 着せかえ人間

「すまなかつた」

頭を下げる体格の良い魔術師。

「……それは、どれに、対しての……」

つい先程まで、手が空いていた女中さん数名に取り囲まれて、女子として磨かれていた私は、真っ白に枯れる寸前です。

至れり尽くせりは楽しいのですが、強制的に全裸にされて、あらあら、まあまあ、言われながら下着のフィッティング…必要以上に乳を揉まれた気が、いや、まさかね…そして、着せ替え人形タイム、そして最終仕上げのネイルと髪と化粧を…。

久しぶりの化粧に、顔面が息苦しいです。

因みにこれら全て、女中さんの私への（小動物に向ける的な）愛だそうです。

今着てる年齢的にNGな可愛い服も、女中さんから頂いたお下がりです…胸の辺りが苦しいけど。

「可愛いと思う」

「は？」

思わず不審な声を上げて、魔術師を見上げる。

22 よし、服屋に行こう

「可愛いと思う。今度私にも服をプレゼントさせてくれ」
真顔で言ってくる魔術師に、引く。

「い、いえ、服は自分で買えますから」

「いや、是非買わせてくれ」

「あ、あのですね、だから、自分で……」

「なんなら今行こう。そうだな、今行こう」

目、目がマジですね！

逃げる体勢を取っていたのに、あっさり捕まった。

逃げ足の遅さには定評があります。

「ちよつと待ってください。私ここで軟禁されてるんですよ？」

「……いや？」

子供のように抱っこされるのに抵抗しながら、聞けば否定され……
否定？

23 実はおもてなしでした、とな

結局のところ、おもてなしされてただけらしい。

高所〓良い景色を見せよう

個室〓ゆっくり休ませてあげよう

お茶・お菓子〓美味しいものを食べさせてあげよう

とって食われるかと思ったから、ホツとしたが…。

「なぜ抱っこで運ばれてるんでしょう…。私、歩けますよ？」

お姫様抱っこじゃないだけマシかもしれないが、すれ違う人に振り返られて辛いです。

「歩幅が違いすぎる」

コンパスの差はしかたなかろうが！

身長147センチと2メートル近い大男じゃどうしたってサイズが合うわけがない。

「…大丈夫だ、まだ伸びる」

それは、私がまだ成長するからがっかりするなと言ってるのか。

「伸びません。もう、14歳の時に成長は止まりましたから、これこれ6年もこの身長です」

ぴたりと立ち止まり、私を見る魔術師の目が大きく見開かれた。

24 プロポーズ

服屋さんに連れていかれ、本日二度目の羞恥プレイ。

服屋さんで採寸等が終わりぐったりしているところに、どろろに出かけていた魔術師が戻ってきたのだが…。

私の目の前に、バーンと現地語の書類を置いて一言。

「結婚してくれ」

何のことかと思うだろう？

私にもさっぱりなんだ、白昼夢を見ているかと思ったよ。

何か悪いものでも食べたんだらうか？

そうでなければ、今まで別段何の脈も無かった人間がプロポーズなんて突飛なことをしないでらう。

とりあえず、魔術師が渡そうとする婚姻届らしき書類を押し返す。

ああ、店員さん達の興味津津な視線が痛い、ここでなし崩しになんかするものか。

「お断りいたします」

「何故だ？」

なぜモクソもあるか。と言いたいところだが、ここは穏便に、

この人は上得意のお客様。

「私の名前も知らないじゃないですか？ 私も貴方の名前を知らないです、なにも知らないような者同士でいきなり結婚などというのは可笑しいと思います」

理解してください、貴方は単なる顧客であります、友人ですらありません。

ふむ、と頷く魔術師。

これで納得してくれたいんだけどね。

25 魔術師さん家

興味津々もいいところな店員たちの視線にやっと気づいた魔術師の配慮により、落ち着いて話すために服屋さんから移動。

ああ、まあ、安心して話せる場所っていったら限られてくるよね。

移動先は、魔術師の家でした。

一応一軒家です、一応二階建てです。

外観は普通です。

中は、男の一人暮らしです。

まだ胞子は飛んでない…大丈夫。

ものに埋ま^ミっているというわけではない、ただ、埃が凄^ヒい。

何年掃除していないんだ。

喘息もアレルギーも持っていないので大丈夫だが、デリケートな人が来たら一撃だな。

居間はわりかし埃がかぶってない…どうやらここが生活の中心らしい、言ってしまう^ミえば、ここで寝起きしているのだろう、そこな魔術師よ！

唯一まともな…十中八九睡眠を取るのに使用していると思われる居間のソファに着席し、事の次第を聞くことになった。

無論、茶など出てくる余地はありません。

26 保護理由

結婚話をとりあえず横に置かれて、魔術師の家に連れてこられた理由は以下のようなものだ。

「どうやら、私は狙われるらしい（今現在はまだ大丈夫だが、時間の問題とのこと）。

理由は虹色魔石だ。

案の定というやつです。

虹色魔石を販売しだして、その稀有な魔石の存在を知った国では、他国に知られる前に、私の販売する魔石を国で優先的に買い上げようという話が持ち上がった。

そして私が王宮に呼ばれ、高い位の某氏との面会と相成ったわけですが。

子供（に見える…心外ですが、事實は真摯に受け止めます）である私じゃ話にならないから、仕入先を聞き出してそちらと提携し、私を仲買として売買するか、私の親に繋ぎを付けて話し合いをしたかった、ということだ。

ちょっと待て、あのおっさんの言葉でそこまで理解できるか！

「うむ、少々言葉足らずなところがあるお方だがな」
少々という範囲の広さの定義を直すといいと思います。

「それでどうして、結婚なんて話が出るんですか？」

魔術師は少し視線を彷徨わせた。

27 結婚理由

要約すると（魔術師も喋りが上手ではない）。

おっさんとの対話が終わり（対話…？）、私が客室でまったり休んでいるあいだ（私的には軟禁）、話し合いにより、私を”保護”することに決まったと。

そんなわけで、保護役として兼ねてから顔見知りである魔術師が選ばれたわけだ。

そこまではいい、まあ、どうでもいい（まずは私に話しを通せと言いたいが）。

問題はここからだ。

「子供なら保護の名目で、一緒に暮らして問題が無いが。やはり年頃の男女だとそういうわけにもいくまい、世間の目もあるのだから、夫婦となったほうが何かと何かと何かと…」

何かとなんなんだ……。

「ようは、契約結婚ということ？」

助け舟を出してみた。

ようするに、私を保護する名目として結婚という体裁をとりたいたいということはわかった。

「契約……ああ、まあ、そういうことでもいい」

歯切れの悪い魔術師だ、それに”そういうことでもいい”なんていう曖昧な言い方はよろしくない。

ジト目で見っていたら、開き直った。

「私は君を守る、君は虹色魔石を国に卸す、そのために一緒になるう。私と結婚してくれ」

思いのほか男らしく潔い、なおかつ真摯な態度が決め手となり、結婚を承諾しました。

ぶつちやけてしまいますと、ここでこの話を蹴ってしまうと、虹色魔石がらみで色々と悲惨な目にあいそうな予測が容易にできてしまうわけで。

メリットとデメリットを天秤に載せた結果、スコーンと天秤が傾いたわけでありませう。

28 契約書に署名

合意の上、婚姻のための契約書（誓約書？）にサインした。

こちらの文字はイマイチ把握できていないが、名前だけは書けるように女将さんに特訓してもらっていたから、よかった。

「綺麗な字だな」

「……どうも……」

自分の名前だけなんですけどねまともに書けるの……と、少々複雑な気分でサインを終える。

「マモリ？」

「そう、守^{まもり}。ええと、貴方の名前は……ノー、ス？タ？リア？……」

ただたどしく読む様子をじっと見つめられ、白状する。

「ごめんなさい。名前は書けるんだけど、ほとんど読めないの……」

識字率の低い国だから、可笑しくはないと思うんだけど。

魔術師は少し考え、自ら書いた字を指でなぞりながら。

「ノースラート・ロンダッド」

「ノースラート・ロンダート？」

「ロンダッドだ。書類提出以降はノースラート・リタ・ロンダッ

トになるがな。これからは、マモリも、マモリ・レイ・ロンダッ

ドとなる」

守・レイ・ロンダッド……。

そうか、名前も変わるのか……感慨深いな、契約結婚だけど。

29 ダニはいかん

さて、保護けっこんという名目のもと、本日から寝泊まりすることになりました。

手際がよろしいことに、服屋で実質的な拘束を余儀なくされている間に、私の常宿から勝手に荷物が移動されていました。

後に聞いた話では、女将さんは激しく食い下がったらしいが、ご主人の嗜たしなめと（むしろ喜んで撤去の手伝いをしたのだろう、ええ目に浮かびますとも）魔術師の押しの強さに泣く泣く引き下がったそうだ。

調印式（印は使ってないがね）が済んで、同居することが確定し、二階にある部屋の一つに案内されました。

案の定埃まみれです、まあ、階段からして埃が堆積していたわけなんです。

何年二階に上がってなかったんでしょうね？

さて、ひとこと申しましょう。

これだけ埃が溜まっているわけですから、当然ヤツらも生息していると思って間違いないわけです。

ヤツら…そう、ダニ共です。

ダニの居るベッドで眠りたくありません。

当然です。

いくらアレルギーがなかるうが、奴らは関係ないですから、果敢に攻めてきますから！

魔術師に……じゃなくて、ノースラアトさんに……呼びにくいからラアトでいいや、実際に呼ぶとき注意すればいいや……ラアトに力説しましたとも。

納得したらしいラアトはポケットから私がいつも高額お買い上げ時に買い物袋代わりに渡している小袋を取り出すと、中から小粒の虹色魔石を一粒取り出した。

「浄化」

まるで2人が同時に発声しているような不思議な声で言葉が紡がれると、ラートの掌の上の魔石が砕け散り、同時に途方に暮れるほど埃まみれだった室内が一瞬のうちに輝きを取り戻した。

初めてナマの魔法を見て、ぽかんとする私。

あの淀んでいた空気も清々しいものに変わっている。

恐る恐る室内に入り、大きく場所を取っているベッドへ近づき掛け布をめくってみる。

「中まで綺麗になってるっ」

心なしか、リネンから爽やかな香りがする気がする（気のせい）。

「当然だ。今の魔石の大きですら、この部屋をここまで浄化することができるんだ、虹色魔石の凄さが判るか？」

全然わかりませんが。

「もっと大きな魔石だったら、この家丸ごと浄化できるの？」

できる、との答えに、大急ぎで居間に置いてある荷物から、魔石のストック袋を1つ持つてくる。

「このくらい？ もっと大きい方がいい？」

2センチ魔石を取り出してから、これじゃ小さいかと3センチ魔石も取り出した私の手から、ラートは2センチの魔石を拾い上げた。

「コレで十分だ」

「じゃ、それをお願いします！」

すばらしいね魔法って！ 異世界に来て初めて魔法に大感激です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5678x/>

虹色魔石の生産者

2011年10月28日12時15分発行